

本書は、コレクター・北原照久がこれまでに出会った方々との交流の中で培ってきた数々のエピソードをもとに、出会いや人生、夢について記したものです。いわば半生記であり、北原照久が蒐集した人生コレクションそのものです。

ブリキのおもちゃ、生活雑貨、現代アート……数多くの宝物の中で最高のコレクションは本書で紹介した数々の出会いであることは間違いありません。北原照久の人生コレクションはまだまだ続きます。

本書は、二〇一一年三月一日から二〇一一年四月三十日に、神奈川新聞で六十回にわたって連載された「わが人生」をもとに、加筆追記したものです。

プロローグ——波乱の幕開け

春三月。この季節は僕にとつて特別な意味がある。というのも今から二十七年前の一九八六（昭和六一）年三月二十三日、東京から横浜の山手に移り住んだからだ。

お彼岸も過ぎ、本来なら春うららかな日差しを浴びながら、横浜での記念すべき初日が晴れやかに始まるはずだった。ところがとんでもないことに、今ふうには爆弾低気圧が関東地方を直撃し、時ならぬ春の嵐が吹き荒れた。

午前中、東京はドシャ降りの雨だった。手が凍えるほどの寒さで、荷積みが遅れ、引越しのトラックが発発するときにはみぞれ混じり。首都高を出て川崎に入ったあたりで完全に雪に変わった。

この雪は東京の春分過ぎの積雪量としては観測史上最高を記録したほどで、途中、渋滞に巻き込まれた。それでもようやく山手に借りた新居にたどり着いたが、中に入って目を疑った。改築途中だった建物の部屋の中まで雪が積もっていた。しかも雪

は後から後から吹き込んでくる。

もちろん、暖房器具なんか無い。キッチンのガスで湯を沸かし、暖をとることしかできなかった。

「よりによってこんな日に……」と落ち込む気持ちになったのも当然だ。同時に、この時の僕は徹底的に無いづくしだった。

三十七歳で独立し、「ブリキのおもちゃ博物館」をオープンしようとしたのだけれど、運営のノウハウもなければ資金もない。横浜に人脈があるわけでもなかったのだから。あったのは、それまでに集めたコレクションと情熱とやる気だけ。

「何もないところから出発するのだから、むしろこんな門出こそふさわしい」

そう思ったら何だか気持ちが悪くなった。このプラス発想が効いたのか、翌日はスカツと晴れ上がり、二週間後に博物館をオープンすることができた。

ところで僕のことを「ブリキのおもちゃのコレクター」だと思っている人は多い。というか、ほとんどの人がそう思っているだろう。確かに「自分のコレクションを展示する博物館をつくりたい」という夢を持ち、それを実現したのだから、その通りだ。でも、ブリキのおもちゃは僕のコレクションのほんの一部でしかなく、実は生活、

娯楽、文化に関する物から現代アートまで幅広く蒐集している。

それに僕のコレクションにはモノだけでなく、言葉や夢や人との出会いも含まれている。「人のコレクション」とは口はばつたい言い方だが、実際、多くの人との出会いが今日の僕を形づくっているといっても過言ではないだろう。僕を産んで育ててくれた両親をはじめ、僕に大事なことを教えてくれたり、僕が困っているときや苦しんでいるときに手を差し伸べてくれた先生や諸先輩の方々、一番大事なパートナー・妻旬子、北原コレクションを支えてくれるスタッフ達、僕が生涯感謝したい人達ばかりである。それに、これまでのコレクション達が朝に僕にアイデアやヒントをささやいてくれる。

そんな感謝の意を込めて、僕の人生コレクションを本書にまとめてみたわけである。それはまた、僕の半生記でもある。たいした取り柄もなく、ただコレクションが大好きな、今風にいえばオタクなのであるが、そんな僕でも、なぜ大きな夢を叶えられたのか——それを知っていたできれば著者としてとてもうれしい。

北原照久



鉛筆削りのコレクション